

# 訪看さん 1000%信頼

## 24時間態勢で助言 不安和らげる

### 迫る2025シヨック

1

9部 訪問看護師の力



高橋シゲさんの口の中をきれいにする訪問看護師の加藤容子さん＝横浜市鶴見区

「シゲさん、おはよう！調子はどうですか？」。1月19日、横浜市鶴見区の高橋シゲさん(99)の自宅。ケアマネジャーで看護師の栗原美穂子さん(49)が、ベッド越しに明るい声で話しかけた。

2月1日に99歳の誕生日を迎えた。ほぼベッドに寝たきりで、胃に穴を開けてチューブで栄養をとる「胃ろう」をしている。栗原さんは、鶴見区医師会在宅部門の総括責任者として、三つの訪問看護ステーションと介護支援ステーションを束ねる。この日は、栗原さんとともに、第3ステーションの加藤容子さん(43)が、訪問看護師(訪看)として入った。

加藤さんは、バッグの中から手早く血圧計や聴診器を出し、脈拍や呼吸音などのチェックを始めた。「はい、お口開けて下さいね。歯ブラシで口の中をきれいにしていく。そして、のどの奥にたまったたんを、機械で吸引した。最後に、指で肛門を刺激し便をかき出す「摘便」。加藤さんは栗原さんの助けを借り、体を横に向け、たまって居る便を出した。同居する次女の敏子さん(71)が「出てますか？」と聞く

と、加藤さんは「出てる、出てる」。「きれいになろうね」。2人は、常に声かけを忘れない。出終わると、「シゲさん、頑張りました。さっぱり、さっぱり」。陰部をぬるま湯でぬらし、きれいに拭き、約1時間のケアを終えた。

「在宅」を提案シゲさんは2007年、くも膜下出血で倒れ入院、そのまま介護老人保健施設に入った。だが、施設でのケアに疑問を感じ、09年に自宅に戻り、敏子さんと孫娘の典子さんが、在宅で介護をしてきた。昨年11月に肺炎で入院、医師から「余命1カ月」と宣告された。だが、十数年ケアマネとして関わり、何度かヤマを越えるのを見てきた栗原さんは「シゲさんの生命力はそんなものじゃない。在宅で一緒に面倒をみましよう」と言ってくれ、数週間後、自宅に戻した。

敏子さんは正直「年を越すのは難しいかも」と思っていた。ところが、週3回の訪問看護などで体調は回復、誕生日も迎えられた。都内の会社に勤める典子さんは、毎日出勤前と帰宅後に、おむつ交換やたんの吸引などをやる。介護のためには一時は退職も考えたが、訪看が来てくれるおかげで、辞めずに済んだ。

「雑談を糸口に」加藤さんがシゲさんをケアしている間、栗原さんは敏子さんと話をしていた。「ショートステイ(施設での短期宿泊)はどうしますか？」。栗原さんが尋ねると、敏子さんは「今は、ノロ(ウイルス)とかインフルエンザがはやっているから心配」。「そうですね、3月か4月くらいまで待たうら？」と助言した。シゲさんのベッドには、ピンクの豚のぬいぐるみ「幸子」が置かれ、毛布はスヌーピー柄。「かわいい」。栗原さんが言うところ、敏子さんは「母は、私が顔を近づけるといやがるのに、幸子だと喜んでますよ」と笑った。

訪看は、体調の細かな変化や胃ろうの使い方などについて24時間態勢で助言するだけでなく、こうしたたわいもない話をしながら、家族の不安を和らげる。敏子さんはいう。「訪看さんに電話すれば、何でもやってくれる、という安心感がある。1000%くらい信頼しています」

「在宅医療・介護の要」といわれる訪問看護師。このシリーズでは、訪問看護師の日常や葛藤、様々な取り組みを描きます。(佐藤陽が担当します)

「団塊の世代」が75歳以上になり、医療・介護の提供が追いつかなくなる「2025年問題」について考える企画を続けています。在宅医療・介護などのご体験や、「介護報酬の減額による現場への影響」などの情報、この企画で探り上げてほしいテーマを募集します。朝日新聞横浜総局「2025年問題取材班」あてに、ご連絡先を明記のうえ、郵送かファクス、メールでお願いします。